

中島晴美のこんな楽譜はいかが 35

中島晴美

フランツ・シューベルト～新井貞夫 編曲

〈アルペジオーネソナタ〉全楽章



— シューベルトの名曲アルペジオーネソナタ、その伴奏ではなく、魅力的な旋律部分をアルト、バスを含む4部のギターだけで歌い奏でる、しかも全3楽章を編曲。これぞ大作曲家シューベルトの演奏会用ギターアンサンブル編曲の決定版！—

今回はシューベルトのギターアンサンブル編曲です。この連載では以前、歌曲〈魔王〉(山崎繁編曲)をとりあげましたが、今回の〈アルペジオーネソナタ〉は純器楽作品、それも3楽章からなるギター編曲作品としては規模の大きなものです。さて、シューベルトとギターの関係については“シューベルトの傍らにはいつもギターがあった”とか“貧しくてピアノを質入してしまったときはギターで作曲をした…”など昔からいろいろ語られてきました。しかし現実にはシューベルト作曲のギター曲というのは残念ながら存在せず、声楽の伴奏にギターを用いた作品があるのと、同時代の作曲家フランツ・マティーカの〈フルート、ヴィオラ、ギターのための三重奏曲〉にシューベルトがチェロパートと変奏を補筆した〈四重奏曲〉がシューベルト作として伝えられてきたに過ぎません。そんな中であって〈アルペジオーネソナタ〉の編曲は、ギターは通常、フルートなど旋律楽器との二重奏の伴奏部を担当することが殆んどとはいえ、ギターで大作曲家シューベルトの音楽の神髄に触れることができる重要な作品です。これをアルトギター、バスギター(通常ギターより4度低い)を含む4パートのギターアンサンブル用に編曲(記譜はイ短調、実音はホ短調)したのが、群馬に在住のギタリスト・新井貞夫氏です。この編曲の素晴らしいところは、何といてもギターでアルペジオーネの魅力的な旋律パートを

演奏できることでしょう。しかも全3楽章の編曲で、全楽章を演奏すれば、ギターアンサンブルとしては数少ない、ロマン派大作曲家の貴重な大曲レパートリーとなります。スコアは日本ギター合奏連盟が会員に貸し出しています。毎回この頁で紹介するスコアは、作・編曲者と直接交渉していただくことが必要なのですが、今回は入手も容易です。ぜひ広く演奏されて欲しいです。

■ギターとチェロを合わせたような〈アルペジオーネ〉という楽器、当時の宣伝文によれば■実物をみたことはなくても〈アルペジオーネ〉についてはご存知の方も多いと思います。19世紀ウイーンのギター作家ヨハン・ゲオルク・シュタウファーによって、チェロとギター両方の特質を併せ持つように考案された擦弦楽器です。しかしあまり普及することなく廃れてしまい、シューベルトの〈アルペジオーネソナタ〉がこの楽器のための現存する唯一の作品のようです。ちょっとギターおよび今回の編曲から話がそれますが、以下〈アルペジオーネ〉および〈アルペジオーネソナタ〉について少々。

・〈アルペジオーネ〉はチェロとは異なる4度音程の6弦の開放弦による多彩な響きが魅力的で、24フレットまでの広い音域を持ち、重音の演奏も容易である。

・当時の〈アルペジオーネ〉の宣伝文には“ギターには望めなかった豊かな音がする”といったことが書いてあり、考案者シュタウファーの意図は、音量の少ないギターに対する、弓を使って大きな音を出せるギターと同調弦の楽器というものだったのではと思われる(濱田滋郎氏の推

測)。

・一方、フレットがあるためビブラートにがかけにくい、誤って隣の弦を鳴らしてしまいやすいなどの欠点もあり、これはこの楽器が普及せず廃れてしまい、以後も不当に低く評価されてきた一因になっているようである。

・〈アルペジオーネソナタ〉は自らギターを弾き楽器をよく知っていたシューベルトが、この楽器の特長である4度音程の効果などを狙って作曲した。

・この曲はエステルハージ宮殿への2度目のハンガリー旅行から帰った直後の作だが、滞在中に書かれたシューベルトの手紙に“本当にここは退屈だが、一つだけ輝いている星があります”とあるのは、おそらくエステルハージ伯爵玲嬢カローリーネへの思慕であり「このソナタは恋文のような真剣さという、青年シューベルトの一つの真実がこめられた作曲だったのかもしれない」というのが濱田滋郎氏の推測だそうです。

■ピアノパートじゃなく、ギターの特質を備えたアルペジオーネのパートを弾いてこそ…■通常チェロとピアノで演奏されることが多いこの作品。オリジナルのアルペジオーネによる録音は過去あったそうですが、あまり内容は芳しくなかったようです。近年リリースされたゲルハルト・ダルムシュタットという人のCDは“不当に低く評価されてきたこの楽器の汚名を挽回するアルバム”との評価もありますが、まだ私もアルペジオーネによる演奏は聴いたことがありません(知り合いのアマチュアの方が、手製のアルペジオーネ～チェロを改造したもので、デサワリを弾いてくれたのを一度聴きましたが…)。ギター編曲はフルートとのデュオが最も多く、福田進一さんが工藤重典さんと録音しているのが、代表盤でしょうか。またイエラン・セルシェルとヴァイオリンのギル・シャムムの録音も大物共演盤です。他にヴィオラとギ

ター、チェロとギターでもしばしば演奏されているようです。さて、これらはいずれもギターはピアノ伴奏パートの担当です。ギターに縁の深い曲といっても、ギターとチェロ両方の特質を備えたアルペジオーネだからこそ、ギターは伴奏じゃなくてアルペジオーネのパートを弾かなきゃ意味がないのでは?と思いますが、やはり弓で弾く楽器のために書かれた音楽を、音の持続しない撥弦楽器ギターで表現するのは難しい、いたしかたないところでしょう。でもそうはいっても、シューベルトがギターのことを意識して書いたらしいこの魅力的な旋律をギター弾いてみたい。ギターとピアノという組み合わせで第1楽章が演奏されているのを見たことがありますし、大阪のギタリスト・山田直樹さんは、ご息とのギター二重奏で第1・3楽章を自分の編曲で演奏していました。またジョン・ウィリアムズはオーケストラ伴奏で全楽章を録音しています。たしかにジョンのギターがずっと美しい旋律を受け持つのですが、バックがオケでギターは単音となると、ちょっと大味(映画音楽みたい?)になってしまう気も。ギターとピアノは音量面でどうか、山田さんのギター二重奏は素晴らしかったのですが結構難しそう。ということで、ようやく今回の編曲にたどり着きましたが、ギター4部で書かれた新井貞夫さんのスコアは、その編成のため技術的な負担もいくぶん軽減され、シューベルトならではの旋律が各ギターパートに振り分けられるなど、シューベルトの名曲がギターで広く楽しまれ、ステージで取り上げられるには理想的なスコアではないかと思えます。たとえば冒頭は原曲ではピアノですが、アルトギターはここから歌い始め、アルペジオーネの旋律の開始はバスギターが担当、といったオーケストレーションです。その後、主に旋律パートを担当するアルトギターの音色は、もちろんチェロとはだいぶ違いますが、清らかで澄み切ったロマンを感じさ